續編并毉家警説

K 48-1

漢蘭酒話　坤

F 2
カ-118

490.4
Ka-6
2
No. 2533
12 K18-1
慶應義塾大学医学情報センター 昭和47年6月28日
慶應義塾大學醫學部圖書
富士川文庫
6663

慶應義塾大學醫學部圖書

漢蘭酒話巻之下

某氏又問曰漢家の瘡瘍察法は愚既ニ命を承り愚は西洋の書のミ読ミて中華の学ニ暗けれバ中華瘡瘍流行の濫觴を志らず願くハ其原始を告げよ余答て曰

中華瘡瘍の権輿ハ史氏の書ニ載せざれバ甚く詳ならざることは紛ろ経し景岳全書ニ云

書に痘瘡一證俗曰天瘡原其所由實由胎
毒内藏而復因時氣外触其毒乃発故傳染
相似是亦天行疫癘證也但攷之内經則止言
癘胗即今班疹之属也故自越人仲景元化叔
和諸公皆無一言及痘可見上古無是證とあ
また痘瘡ハ中葉よても後世に始りたるとみえ
たり其ゝ病の医籍に載せられたるを總攷さてあり
外臺秘要といふ書には漢の建武のはしめ

中国より南陽の虜を征伐せしに其時の人に
虜よて痘瘡傳染し來りて中国に始てその
病ありしといへり赤水玄珠といふ書及び痘
經會成といふ書にこれと同説あり又袁氏世
傳痘疹全書といふ書には漢の時張騫といふ
人西域に入りしその時痘瘡傳染して始て
中国に入りたりといへり又肘後方といふ書には
永徽四年痘瘡西域より東して中国に流

入ると称して流行原始の年代説く所各同じからざれどもさて漢の建武といふは後漢の初帝光武皇帝時代の年号なり又漢の張騫といふ人西域に入し年は前漢書の列傳に據るに建元年中のことなりと記せり建元といふ年号は中華年号權輿の原で前漢の孝武皇帝の時代なり前漢の孝武皇帝より後漢の光武皇帝までは孺子嬰王莽を數ふれば十二代を歴て甚だ久しくあるなり又永徽といふは唐二代目の天子高宗皇帝時代の年号なればこれはまた年代大に隔たりたることなりいづれも正説なるや今日より明に知るべからざれども前漢の建元年中に痘瘡はじめて中國に入りたるといふ袁氏世傳痘疹全書の説に依れば建元年中より張仲景孝廉に挙げられし長

沙の太守になりたりし後漢の霊帝の時代に
至りて（張仲景孝廉に挙られ長沙の太守となりたりしは霊帝の時なりと医史にみえたり）
三百年餘に隔たれば此方には必蕃衍し
て海内一般流行すべきに似たり されども傷
寒金匱には其病絶てはなし 至き王は
されば此説疑ふべきなり 又永徽四年痘瘡
始めて中国に入りといへる肘後方の説もし
信ぜは三因方といへる書及び続医説といふ

晋に魏の代に既に痘瘡始まりしなりと
載せられたれば唐の永徽四年よりといふ説は謬なる事
明なり 左されば後漢の建武年中中国より
虜を征伐せし時痘瘡始めて中華に入り
たりといふ外臺秘要赤水玄珠痘經會成
の説も正しきやうにおもはるゝなり 建武年
中より霊帝時代までは百五六十年ほど隔
てれば此方には痘瘡有まじくは何国にもあるべき

国にいたりて南陽長沙あたりにははたくるしめりし
ゆゑ仲景氏も此病を主としてめくみたまへり且
疱瘡此一名虜瘡といへり赤水玄珠痘經
會成にいへるには建武年中虜を征伐せし
時中国にはしめて流傳せしといへり従の正し
き一徴なるへし蓋し痘瘡ハ後漢の初より
濫觴し三国に至りて漸く蔓衍せし也
魏の時にはしめて其藥方もありし魏の時
より隋のころまては蔓衍せしといへともいまた天
下一般流行せし程にはいたらすして高平なる
地のはなはたしかりしにそ王叔和（王叔和ハ高平といふ所の人なり張卿子か医林列傳にいふ晉の人なりといへり）
なとも此病しみさるなり隋の世迄
歴て唐のはしめ永徽四年に天下一般流行せ
しゆゑにかなしみたるからこの事を深く傳へ
て肘后方に永徽四年痘瘡はしめて中国に
流入せしといへることのせられしなりさて又足下

周匝ハまはりのこと

彌歳ハ歳をこえてといふ事

淳龐ハ生質の実体なる事 朴野ハかざりのなき事ゆへ上古迄の人のことく

今ほかのよし余か今論せし昏の文語を挙け示すへし 外臺秘要曰肘後比歳有病天行發班瘡頭面及身須臾周匝状如火瘡皆戴白漿隨決隨生不即療劇者數日必死療得差後瘡瘢紫黯彌歳方滅此悪毒之気也世人云以建武中於南陽擊虜所得仍呼為虜瘡 赤水玄珠曰上古之時未聞瘡痘之疵素難之文鮮有及者豈其人淳龐朴野

未漓とは水滲て地に入るを漓といふ未漓とハ分離せぬ時のはじめのことなり

積精全神虚邪苛毒莫之能害歟或云自建武擊虜遂染其毒流布中国謂之虜瘡 痘經會成曰上古渾沌未漓故痘瘡未興迨自中古漢建武初征南陽諸虜所獲名曰虜瘡 袁氏世傳痘疹全書曰痘疹一症上古無之漢遣張騫入西域始傳其瘡初日尚鮮後漸蕃滋今則薄海群生間有不患者亦罕矣惟其毒始于漢故漢以前医經無其說肘后方

曰永徽四年痘瘡従西域東流于海内といへり是余か総攷せし書の大概を挙て足下に示来諭によりてまうしつるなれは学の長するに随ひて見出もあるへし余かいへる語は其階梯とこそすへきなれ

○某氏又とふていはく痘瘡はいつの皇朝に流行せしは何れの時代より権輿せしや余答て曰余も和学に暗けれともこれまては訣説あるをもては知られたるに我本邦疱瘡流行せし始は聖武天皇の御世と見えたり塩嚢鈔といふ書に聖武天皇天平八年丁丑天下疱瘡起といへりなれとも紛失て絶しその書は余所持なれとも今（索捜にことゝはさくることなり）示すを能はさるなり他日足下索捜してしるへし

○某氏又問曰痘瘡の字はいつまての世よりあり

やはありこれを主薬よ用ゐしもとよりなるや、余答曰、薬なりゐしてこく、痘瘡の薬は、魏世の末よりおこりて出来りしとみえたり、三因方には班瘡内經與張仲景皆不載、尋據方論、盖自魏朝方有とあり、續医説には、痘疹自漢以前方書不載、至拓拔（タクバツ）魏時始有方藥とあれは、是その徴なりけらし、此時何等の薬を主として用ひられしにや、今知るへからす、外臺秘要に虜瘡

（拓抜ハおしひらきて破りとるこゝろ魏の城邑を破りとりし時といふこゝろ）

諸医参詳作療用之有効方取好蜜通身摩瘡上、亦以蜜煎升麻數々拭之亦佳とあり、又但煮葵菜葉蒜（サン）韲（セイ）啖之則止、鮮羊血入口亦止、初患急食之少飯下菜亦得とありて、魏朝の時の痘瘡藥方の不備にてありしそ知るへきなり、活幼心法痘科鍵なとの書出さるゝ以前は、痘藥並痘療のことは甚疎なりしとみえたり、さて後世に至りては痘瘡の世話

（蒜ハにんにくの事　韲ハかしき　和ヘ菜のるい）

抄列する方は何れも實にまて黄鼠集験良方にも見へ昏
に治痘風眼用本人痘瘡殻或同父母之兄弟痘
瘡殻研爛将香油調和搽眼邊皮上二三次神
効とあり本草綱目にも人部にあまたも痘瘡殻
の効を載たれとも果して効験ありや否をしら
されとも奇方としるへし又張氏医通にも
昏に移痘丹治痘出目中初見點時用此移之
守宮十枚去頭足配辰砂一銭陰乾珍珠茯神
遠志肉各一銭二分琥珀五分為末紫草膏和丸
如梧子毎服一銭二分欲移在手足観柱蔵靈
仙煎湯下欲専移在足牛膝木瓜煎湯下微汗
為度再用後薬二服川芎藁本荊芥白芷各
五分蝉蛻三分防風八分生姜一片葱白一茎水煎
温服とあり此方は痘科の諸書にも収めさ
れは果して効験ありや否はしらされとも誰
人か經・験せしものあらは傳へ教へよかし甚ら喜ひ展へし

なり余十余年さきに大和の国に遊歴せし時一小
村の俗人痘瘡目に入りたるを療する事ありて
百日をこゆるまで治せず因に必効験あるよしなりし人
の悴を救ん事余に請事あまりにある故余窃にその
ことのさまを見て方を疑ひ読せしに先づ痘毒を診察
して眼病は世俗に伝ふ蚘虫下しを飲せて看病
のことのみに言含めこれは病を自然必蚘虫下る事
便毎に心を付て蚘虫の下りたらは速に示せよ
其蚘虫此所に随ひ其方を定むる事難き
其蚘虫を得て是両三あるを焼き乳鉢にて極末し
研り乳汁をもつて或は一眼或は双眼患ふ所の中
に日に二三度づゝ点じ彼薬は何事なりとも飲好
き薬剤を投し其は百人に九十人まで効験ある
と語りける余其後数家経用を採りたるには蚘
虫の汁にて目の翳膜を除く効を載せしこれ
方も治療家にも伝へ経験したくおもひ居りし

こゝなり又徐后山柳崖外編といふ書に天台道士疽瘡腐爛成功の事を載せたりこれは道士神仙の法にて医家治療の事に渉りされども瘡科家瘡事を博く知らんと欲せば是て見も可なるべし（天台道士疽瘡腐爛成功のことは文長し今こゝに載せず本書に就て見るべし）

某氏又問曰世俗瘡瘍に灸療することあり固く禁ずるは一般の事なり中華の瘡科書に灸療を禁したるものなりや余答曰諸の醫書を攷するに古人も瘡瘍に灸療は忌ざることなり

尖ハ根ハ大きくして先の細き所を尖らす

千金翼といふ書に豌豆瘡灸両手腕研子骨尖上三壯男左女右とあり證治準繩といふ書には

薛疽亦謂二之賊疽一或三五枚或五七枚間雜於諸疽之間一其色紫黯作レ痛不レ寧以致二諸症蜂起一不レ能二灌膿一甚至レ不レ救乃熱毒甚併結也用二仙方活命飲一如未レ應レ急用二隔蒜灸一若毒氣盛者或不

知痛者不用蒜隔就著肉灼艾灸之若灸後瘡頭紅腫発焮用針挑破出毒灼艾左好とあり又疱疹要本といふ書に活血解毒湯宜灸風池曲池三里とありて古人痘瘡に灸療を忌ざることを知るべし

○某氏又とふていはく麻疹は何の書に見えし権輿ぞや余答曰古人麻疹の濫觴を説なるを聞かず蓋し古人は痘瘡麻疹一物とせしと見えたり三因方に班瘡病以白頭赤根者俗呼為豌豆即班瘡也細粟如麻者俗呼為麻即膚疹也又有大者俗呼為羊為蕁此皆軽重之不齊故命名異耳とあるを見て知るべし

○某氏又問曰痘瘡には中氣にて死ぬるあると のありしとやうす恐いかにいふことなるを不知願く きかんとす余答ていはく余は痘瘡此ことを経ても

名紛らはしけれは紛らはしたけの異称を挙け示すへし赤水玄珠に自建武撃虜遂染其毒流布中国謂之虜瘡或曰聖瘡言其変化莫測也或曰天瘡言為天行疫癘也或曰百歳瘡言人自少至老必作一番也或曰豌豆瘡言其形之相似也とあれは虜瘡聖瘡天瘡百歳瘡豌豆瘡は皆痘瘡の異称なり三因方班瘡病大者俗呼為羊為蒔とあれは班瘡は痘瘡の古名にて羊蒔ハ亦皆異称也外臺秘要には痘瘡を発班瘡といへりまたそれ古名なるへし

○某氏又問ていはく我か

皇国には諸国に痘瘡神の祠宇何れの武蔵国にある祠宇の記に見えたるものを挙くるに浅草観音堂の後にあるを疱神号し只疱瘡神といふ曹司谷鬼子母神の廟内にあるも護神といふ

鴻巣の大宮村に阿るを宗像神といへる社号
各同しからず中華の痘瘡神も其社号一
様ならさるはいかなるや余答ていはく世俗に痘瘡神
といふ神はなし
皇国にては上古伊香我色許男命の定め玉ふ
八十万神及ひ中世
延喜皇帝勅定したまへる六十六州神社の数に
入らぬ不正の神なれは尸祝せしものゝ名も異なる社号
に定まるなり中華の痘瘡神も又不正の神
なれは其社号一定なきなり信徴録といふ書には
痘神号痘瘡太老といひ耳食録といふ書に
痘神蓋女仙之流人呼為麻娘といひ猶園といふ
書には痘神名花ゝ五聖又曰痘鬼又呼為碧
星といへれは中華の痘神も皆淫祀といふへきなり
○某氏又問ていはく中華は宇内第一の文国にて
何事につけても詳に証せられたるものなりといへり

定めて彦唐の癖を耽したるにあるべきなり、いつまでかはながく詩に耽したまふにや示し給へ、余答ていはく、余は二十四五歳の比、梁川星巌、塩田随斎といふ詩人などの勧に依り、一両年の間詩学三昧になりたる事ありたるまでにて、自ら聴し思ひなりしに、勧善懲悪は詩の用なれども、三百篇の古経にて足るべし、唐宋以来の詩風など学んで、其祖の如きに至りては、李杜楊陸の諸子と軒輊するまでにて、彼徒のごとき世に何の可なる事、無し、まして可なる技芸を学ばんとすれば、詩は無用の長物なるべし、况して我家累世の医家故、儒学の暇に医籍を読こそ哉、

皇朝

欽明天皇の時、医博士など置き玉ひし遺風など慕ひ、いにしへの医籍は少の発明ともせば、己が保生のみならずして、天下刀圭家仁術の一助

三昧とは調直といふの梵語に正に調へることをかくるなり

軒輊とは軽重といふことぞ車のおも頫きを輊といひ後の頫きを軒といふ

またあり、幽冥の祖先とは悦ひあへりしとかなし
定めて、それは詩集なとには棄施して更る
あまたあるへきなれと、但儒経と医籍にはなき、因
挙せしのみ、古人の詩にはまれに詠みたる鮮し
詩学のことに味ある時、随園か小倉山房集、おほよそ
詩話なとは天下一般人口に膾炙せしものゆゑ我
一読せしなかに、随園詩話なる中に痘瘡
の詩あるをもて抄録し、左にしるす、其詩話曰、

痘瘡之説自馬伏波征交阯軍人帯此病帰
号曰虜瘡不名痘也語見医統余考史册凡
載人形体者妍媸各備無載人而麻者惟文
苑英華載頴川陳黯年十三袖詩見清牧其
曰篇詠河陽花時痘痂新落牧戯曰汝藻才
而花面何不詠之陳應声曰玳瑁應難比班
犀點更嘉天憐未端正満面與粧花似状
為痘痂見歌詠之始といへり、されハ従ふる

いづれ歟此論は是を濫觴とみへたり。

○某氏又問曰、疱瘡は自然の疱瘡を待ずして種痘法なるもの第一の良方となすは我西洋究理の説なり。何ん様自然の疱瘡は十人にあれは七八人は雜痘なりとてのかれしも、種痘は十人よ稀まては二三人よりは雜痘なきものゝ滞なよてあり此方何りや。如何。余答曰、種痘は滞ると、ありて医宗金鑑といふ書に始て種痘門といふものを立て論じたり。又黄晟集験良方といふ書にも種痘の法を載せたり。其文曰、嬰兒痘疹個々不免、或週歳、或二三歳、以至十數歳、必要出痘。但痘係天花、常因天行時氣而出、若本年時氣好、出痘保全者多、若本年時氣不好、出痘保全者少、嘗見一鄉之中、因痘而殤者比戶皆然、甚是可傷、今福建廣東江西地方、向有種痘之法、每當天時溫和之氣、遇人家嬰兒

痘之稀少者取其痘殻四五粒研為細末用綿
包裹男左女右塞在嬰兒鼻内二三日自然身
熱出痘所出之痘輕者不過四五粒重者不過
一二十粒痘稀毒亦稀万安万穏といへる説あり
摺臣といふ人願作廣類集といふ書を著して
種痘のことを論し排斥せり其文曰小兒種痘
一説縦使其術頗験後来定然復出為患愈固
行此術者誑言誘人孰如痘出有時惟當聴其
自然乃忽於安居無事之日令其速出因之現
前受害者不少此不待智者而後知也余謂人
生子全頼父母心田培植方能保全耳曾有敬
痘神一對兼天地權衡種根苗感應不爽察
父母善悪施順逆旋轉無差と論しけり余以為
此論ハ君子の正論にて非に似たれとも種痘を排
斥せしは一を見実なる活眼（ガン）なけれとおもひなすこれ
種痘此ことなる余一〻此語あり足下能〻考へて

帷を下すとは漢の董仲舒といふ人帷を下して教授せし時の故事あり

天理に随ふべしとて余京師に帷を下し弟子を教導せし时余が門人中山某といふものゝ長男次女あり[illegible]して夫婦二子の疱瘡安穏ならしめんことを常に念慮する程子が曰よりも見えたり聖人祈寧を両一日も

祈寧とは書經の君奭の篇にありこゝにて祈は大なるよろこびておほいなる寧やすきといふ也

怠らずして余が門に来り勉学せしめけるに或时十日程も見えざりしゆゑ余塾中のものに中山某久しく見えざりしは何故ぞと問ひ尋ねければ

一塾生答へていふに某此比家に故ありて帰けり長男は疱瘡し至極安穏にも済しけるが次女はいまの疱瘡せんとするよし申しきたり夫ゆゑ年らずとらんとせりと告げしかば余これを聞きて勃然変色して歎じいひしはさても某は年月聖道を学びながら道理に昧き人なるものかな疱瘡するものは百人が九十九人迄順病安穏なることなれども[illegible]一ツしも中其人生命を殞さば

何となれハ苟も天理人情を弁へたる人の為すに
忍ひさることなり況や種痘とて十人に種て死
痘に必輕なるものは七八人あるさへ二三人も或ハ難
痘或ハ死痘に至ることあり且又人の性質に係
一生痘患を免れ長壽して終る人も間々あれハ
其まゝ捨置ても由なきにも性質なる生まれてより知らす
夫に強て種痘し縦ひ死亡の危に至らさるとも
求めて病苦をなさしむるは父母の子を慈する
の道に叶ふへからさる事なり又只獨りの男子なるに於て
不幸にして胎毒發起する先天を知らすして種痘して
毒痘なとに患ひ遂に死亡に至るなれは我子に不慈
なるのみならすして祖先の血統を求めて絶ちたる
道理なれハ孟子も不孝有三無後為大との意は
其の如きは大不孝の罪に陥入る事は不慈の禍に
死し実に人倫の大変ともいふへきなれ總て何事
まても萬と此中に九千九百九十九まてハ大丈夫なる

ことなれは其中只一方交合のなき危なることにて何
事は絶へて行はせさるまてさらは聖人の道なるへし
勿論人の生死なとは何日何時とも知らす今日
穏きことのみにて今まて無病息災なる人も何かしらて
忽然卒死するもあるなれは第一親として子の命抛て
死するは時節の知れさるなれは不孝なれとも至る所は
種痘して死たるは纔に命抛て死たれとも
無辜の子を害せし罪は逃れかたき冥誅鑑
責帰する所あるへし、さて又子の安穏を求めて
危き種痘をなすは兵（ヘイ）家の所謂陥之死地
而求生路といふものなり、豈親の子を視ること
戦軍の時なる大将の血縁もなき士卒を
視るかことくにして可ならん哉、種痘をなするは中
庸にいはゆる小人行険而徼幸のおもむきにて仁人
君子の行ふへきことにあらす、何となれは父母たるもの
子を愛する道は世に痘患一生免れて長寿

また移る人はなし何までは我子をかくあらたらしむ
これらの飯は取りても年ぬるをやれるもあれ
みなりて死し道なるへし御しおきては人力祈祭
の届べきにてもあらされは平生其子に飲食有節
起居有常寒温従時の出来たる故に種痘す
なる猶其ありとも天然痘瘡の運中をとまる
べきなりかくまで我身をかへ人力をつくしても
其身の不幸にて難痘に罹り死に至るなは

こともは寓に天命と仰らるるのみ天理人情の
道なきことの有りを論して誤まるは命しを急ぐに
其人を余が家に呼寄たる識論もいひしやせ支
重ねていひ健其子足下もし御国の今度
ましく第一幼年はしく痘瘡隠せまいさまは
第全てもとめんとて種痘を勧め行ひ玉ふへしむ
へき也其時は第にうなて危難なき性交令ち
本のとしおりみをなすれは第一危難つき安堵なる

至らで死すは有命なるといへども一家は滅亡に及ぶへしとおもひ悔みて種痘は勧めざるぞ後世を祖と父の子を祖として諸子齊しからずとしても皆人倫の大事とこの事なれば第一危ふむることは所ふへきにのみならずなりと説き聞せられば世人能く感歎解悟して次女に種痘せしこともあらずてしさて西洋なりとは固より聖人の教導なき国なれば小便を便とおもひ大便を知らざるものなれども種痘を天理人情に付いさゝかのことはこれ法のさるはいふまでもなければ深く咎むるにも足らざれども清朝の康熙乾隆の二帝は皆聰明の君なるに御纂金鑑に種痘門をのせられし是感じけるにしこれ迄中華なれども聖人の道暗きとなるゆゑにて感傷に堪ざるなり

○某氏又問曰凡人死喪を哀しまざるはなし

然し瘂瘖にて生まれ子を喪ひたる母のかなしさは
殊更甚しきものと見えて先は一二両家瘂児を
喪ひ其母哀傷甚しく四日の間墮涙絶さる故
盲目となりたり音にきこえし孔子の弟子
卜子夏といへる人は子を喪ひて目暗になりしと
いふことを人口に伝へきたれども是は虚実
定め難く思ひ居りしに児母の盲目になり
たるにて其の実なるを知りたりかくのごとき

漢の医経にも此説あるにや余答曰墮涙絶さるは
固く盲目になる所以をいはゞ人の神気衰へしとき
至て霊樞口問篇曰悲哀愁憂則心動心動
則五藏六府皆揺揺則宗脈感宗脈感則液道開
液道開故上液之道開則泣泣不止則液竭液竭
則精不灌精不灌則目無所見矣とありこれ
哀傷度なるときは墮涙止されは盲目となる所以
の理なり今の世俗泣く目あれどなき涙といふ

説の本は呉楓より出たることのよしなるたり、

○某氏又問曰、愚が今治する処の児母小児患痘の時、世俗人のする事に、痘児の屎尿を嘗めて見これ味をも愚に告らまてり、愚は屎尿の味を診家の用となすといへは、我業家にはいまた聞さるなれは、但唯説にして聞きたり、漢家には医道診家の用となす説ありや、余答て曰、屎尿の味を以て痘病をしる事は、医書儒書にもみえたり、名医別録といふ書に人屎味苦、人尿味鹹、此言平人屎尿耳、若病人則屎甘而尿甜といへり、外臺秘要には李郎中消渇論といふ書を引て、消渇者原其發動、此則腎虚所致、毎發即小便至甜といへり、是屎尿味の験医書にみえたることの如し、歴史綱鑑補といへる儒書に、魏元忠病、郭霸往問之、因嘗其糞、喜曰、糞甘則可憂矣、今苦無傷也といへ

是は屎尿の味まて病診の用にたつことのみ
ならず

○某氏又とふていはく世俗に痘児年七歳或ハ
十六歳なれハ病あるは危難の病なりと
いふ人あることをきゝてことに足るもの多し
か痘瘡流行の時なれハ痘を療治して次と
云ふ人の所謂孜らるとも言ふへき萬世を括
すおかたる人此俗説に付て未得てハあらす
何ことのあるやと余答ていはく世俗にいふ厄年也
道家にては厄會といひ医流にては年忌と
いひ古昔よりの事なり紀し道家医流との
心志各同しからす医流にては疾病の厄年
をいひ道家は重く他の禍災をいふにて
是如あることなし今此七歳十六歳の痘児ハ
危難なりといふ俗説は霊枢に出たる
ことなるへし霊枢陰陽二十五人篇に黄帝曰

其形色相勝之時、年加可知乎。岐伯曰、凡年忌下上之人大忌、常加七歳、十六歳、二十五歳、三十四歳、四十三歳、五十二歳、六十一歳、皆人之大忌、不可不自安也。感則病行、失則憂矣。當此之時、無為姦事。是謂年忌といへり。是ハ疾病厄災の年期といふなり。

○某氏又問ていはく、疱瘡と云ふ病にて哉。皇国の内にてハ何ゟ始ハ何り、又むかし始ハ何り既に八丈嶋にはむかしよりなかりしといへる人多しといへて、併皇国なれとも西の本土にハ無法疱瘡といふ病なき故如ハ天の気なれハ、疱患の人あるときハ家毎忌み嫌ひて、父子兄弟の間にても其人を別外にし移し隔て看病して、中々むつかしき由也と中華なとにも何やうのことなるや。余答ていはく、五雑俎よりに書る、韃靼種類生無痘疹、以不食鹽醋故也。近聞其與中国互市、間亦学中国飲食、遂

時一有之彼人即舁置深谷中任其死生絶跡
不敢省視矣一云不食猪肉故爾とありけり
或人享保年中に朱佩章来客長崎日有
司問以痘瘡不行地對曰山西大原府上郷
堡小兒不發痘瘡とありしは中国にて又痘瘡
なきさたかのらんこたへり夷俗記と云書に夷人
原不知機祥之說其所最忌者無過於痘瘡
凡患痘瘡無論父母妻（兄）弟妻子俱一切避匿
不相見調護則付之漢人如無漢人則以食物
付之他所令患痘者自取之也至若夫妻之
患痘也必俟聞雷声然後相聚不聞雷声則
終年避匿如路人然其地寒患痘者少視内
地若火宅不肯久留慮患痘也とあれは天竺
爲の風俗は夷俗記に謂ゆる所と異ならず同し
まじはりをたつ痘瘡は縱ひ如何なる惡瘡にても
肉族我家にてかく忌嫌ふへき道理ある事當

ことなり既に孔夫子が弟子伯牛といふ人も

癘病にて死せしに其最後の時夫子これが手を執

くかなしみ給ひしにあらずは此是天然の病ならん

師弟の間なれば是を捨かねたる様もましましけん況や

父子兄弟の間といへとも一つ家に家居は小為也敵とは見

なそらへ術しかたの

皇国界域の内にありて東俗を究まさるは辱

へきことなれは何咄（トツ）にも古他の事なからは悟して

風俗を改めさせ行きたきものなり

○宋氏又くはしくいはく癘は癘氣なる色に戻り穢く

解悟せしの但癘は癘氣にして甚解し難き

は或は国に鬼神に憑るとの二つあるに至ては家

傳の説にも明らかならず又諸家の説に諸人

に問ひ答ふる皆孟浪の説にていまだ信ずべき

説なき事のみなりこれは定めて確説ありぬべく

おしらるゝことなれば願くは發蒙解惑させんのみ余

答ていはく、瘧此原因ニ病あらず、人の腸胃
なり、奇異なるは鬼神になりとする人の精爽なり、
其義委曲に論し悟すへけれとも長けれは宜
しく五更に及ひぬへし、酒あまりても肴（サカナ）なき、余はまた読
論は借らねは先ず論説を止めにして下物な
くれしは大白をあけ碎をなく噛み下し所あ
余足下の家に往き、従者弱して太此説を
誦すへしとて手に録頌して余碎中の無に

おもの所得此れ詩一絶を作り乃ち読みしもの人
蘭賓漢主漆膠交、論説不同何用嘲、對酌勿
嫌無下物、蟹行鳥跡足嘉肴、故作者て
あきらく、余は此を作りて碎儒なり、（瘧の原因ニ病よいはず瘧虫の事）
其あるは鬼神になりとする説
漢篇に讀まれしものにす

漢蘭酒話續篇

學半樓主人　著

題詞

頃日某氏の招にして、英吉利の濁醪
一樽携へて、来るを待に似たれハ、主人書を乞て
余に至りて詩を請ふ、辭すへきや否、杯に酒を
温め寒を防く、猶借曉昔にして、初めは音読
難くして甚醉ひ、敢て殺廻にあらハ、余頗る

酒力を借て其喙将に三尺ならんとするところ

まゝ経読史語のこゝろ勧にて主人今きけりを視（祝）

ひとはしく盃の献酬を休め儒談医論起し

促しぬ。

主人乃問曰疇昔より汝の痘瘡の源因庶くは

詳なる説ありて言ふへく是に惑を解きたまへし余

答曰漢土にては銭氏か小児直訣よりして書

痘瘡の源因を論しあり其言に曰小児在レ

胎食ニ五蔵血穢一伏ニ於命門一若遇ニ天行時熱一或

乳食所レ傷或驚恐所レ觸則其毒當レ出すとこそ

説の非なるをしり魏氏か博愛心鑑よりして書す

排斥して其言に曰前人謂ニ痘出之由一言下小児

初生時口含ニ胎血一咽下至ニ於腎経一以致上如レ此予

謂非也且児在ニ胞中一気團ニ於内一血護ニ於外一内

外堅固風気不レ通惟臍帯中隨レ母呼吸水穀之

（窨ハ地室なり　地の穴藏を指て室といふとしたる　こゝにて窨をも満して子の母の腹の中にありて水穀の氣を受るより生する事なりとそ）

氣窨入兒腹、即胞漿是也、以是長養兒躰、如血走漏、其胎不成、或有墮胎者、此則損傷胎血故也、及至降生、其根蒂脫於左腎、母氣始離而投於子氣、即從丹田湧出兒之口鼻、鬱悶不禁、頭重子體、故從下湧躍而出也、豈有兒含胎血之理、間有降生之際、母血太盛、灌入口鼻者有之、總人胎血灌入口鼻而咽下腸胃、開乳之後亦必從大便而出矣、夫豈有逕入腎經之事乎、且腎有二、一為腎、一為命門、皆繫於脇之尽處、權骨兩傍、初無門路通腎、況血本有形之物、亦母形之餘、何由含兒之口咽下入腎藏、畜至一歲及六七十歲而後始發為毒、と此説ハ銭氏より痘瘡源困の説を破りしと謂ふへし、且又他啞科の書にも、痘瘡の因を色〻に論し何れもいつれも、こと〳〵く皆異説ありて因縁まて、先天の遺毒よりなるを漏らしたるなり、然し果して諸説のことく、痘瘡ハ

胎中より受くる所毒なれは先秦以上の人のこと
何すへき筈なるに何として漢代以来しらしめて世に
顕したるや殊に素問に拠えては先天の胎毒は
往古の人にも有りたるものなり左すれは痘瘡と
いふこと上古の世にもありきたりつることなるへし是可疑の一つ
なり素問奇病論に曰帝曰人生而有（下）病（二）巓
疾（一）者（上）病名曰（レ）何安所得（レ）之岐伯曰病名為（二）胎
病（一）此得（下）之在（二）母腹中（一）時（上）其母有（レ）所（二）大驚（一）気上
上而不（レ）下精気並居故令（三）子発為（二）巓疾（一）也とあり
に拠えては上古此時殊に先天の胎毒ありし
ことの至る明徴なり又痘瘡とも必定先天の胎
毒なれは胎中より瘢瘡毒なれは受け来ると
同様のことなれは一生此同類ありとなして病むことの
ことあるへき筈なるに痘瘡斗は生涯の中に一度
と限ることのみ可疑ことなり又痘瘡も必病毒と
あらは如何程の疾病にても世に薬治なくしては治す

瘢形はかさあとのこと

可為守ものにて痘瘡ものかハ從ひ一方稠密にあらず
しもの形病なるときは一線の薬用なくして見
點より落痂に至り瘢形もなく愈るは可疑の三なり
また先て其毒癥瘡の故は人に必しも一定なることなく
てなきもあり痘瘡は先て其毒ハうけ百人に百人まて
必患ぬ事さる人なきは可疑の四なり又痘瘡な
き八丈島のごとき土地の人も伊豆國なる痘瘡お
ある土地に来りては多く痘瘡お受患せざるもの希には
痘瘡は其毒を胎中より受け来るならば何れの人にも
因縁なれども只其の地流布の風氣を受けるゆゑ
発せざるもあるなり然して胎毒なら内に蓄へ在
は必他患をなし病身になるべき筈なれども
八丈島の人とても痘瘡を発せずして人同様なるに
病痛なく一生壮健なるは可疑の五なり然れば
以て余は乃ち断定して痘瘡は源因は病に
あらずして體中有害無用の積液なり積て足下の

ゆゑに詳にこれを辨せん夫人の精液ハ父母より
稟うけしものハ元真といふべし一生元真の精液を補
益し長からしむるものハ専ら飲食
にて醸しなすものなり上古の世ハ人氣質朴
にして飲食ハ制節あり五味ハ調和の中適を
失はざりし故に體中常用の精液のミ生ずれども
後世にいたりてハ人氣衰へ淫に流れ肉食穀食魚
食菜食の國となり飲食の度なく五味調
を失ひ淫味ハ常に中適を過ごすゆゑ人體自然
一種の隔世用の精液を醸しなしてその子に
傳ふるものなりされど隔世の精液は體中
常用の品物なれハ其毒ハ附て氣血にかゝり定ところ
肌肉につかしめ除かることを害せんとする故に
常に天地自然の人の精液を節する流布の宗
の感するを待て一方の良健強くして其用の精液
を皮膚の外に発せしむることあり是を痘瘡

の原因なり、是を以て痘瘡は上古質朴の世になくして後漢季世に及て始る所以なり、其痘因は病毒のごとく浸侵することのまぬかれざる也、忽生つる其胎精四鬱発して長育の節に至る時、一たび外に発もするとは、其根柢存る也、之生涯一度より痘もなき所以なり、さて又有発生長は偏に飲食より滋く又五臓の精液を醸しなせしもの、其汁は気血精定り、肌肉に又深く長育の節をすなしきたる也、之継ひて地節精は常に感ずるより、自醸は液精已に良能の力までは発もすまじく能をすしてもし、平生種々子に伝ふるなり、痘因は固より病毒にあらさる也、之従ひ一身稠密にも来しより、他病混入なきかぎりのゝ一様に其用なくして痛所となく愈る所以なり、又之を有餘無用の精液は人胎中より有用の精液と交る時、同しく混交す

る事の世の凡人みなことの百人か百人迄皆々其種を受
さる事のなき所以なり又痘因を胎中より受け来
る事は何れも此国の人は皆同様なれども只気
寒なるゆへ天地人精を感する流布の気なくし
て一生発痘なき所にありても其痘毒は何れ
さる世界に生るゝ人なれば毒気鬱蓄して胎病
なく病患の患なくして痘瘡発もする土地の人
と同様なる所以なりさて世中に毒を痘といふ
この故に種々の雑病を発するもの何れは先天
の胎精児體に発動せんとする時胎中の遺毒
混和し或は其時流布する気に邪風を帯して
人に感し或は其胎此精液発するもの時同気に
求めて有用の精液までも侵しくして傷に発して
せしめ遂に表裏虚脱に至らしむるといへる
又薛痘疔なるのことき偶々痘を離発して
種々言し難き悪病を起して竟に死に至る

しかるところの何りとしてより夫は平素他病混入
の痘瘡にして痘瘡は諸家とはいふそのよ
さることのなり漢蘭は先哲皆此理を知らず痘
瘡は偏に胎毒なりと執りしは大なる誤なり
よりふへしさて今論ずるところの悪瘡に至る
因縁は一概ならず胎中の胎毒混入或は天地
不正の邪気に感じ或は有用の精液誘引に
依り虚脱し或は血液不順にして薜瘡并
なりき生ずるに依るところの何りとしてより十の九は天地
不正の邪気に感じて雑病を発すところの多し縦ひ
其児胎中の胎毒何りとも資質虚弱なき最き
指系まで血液不順に至る之等は胃腑まで
こそ天地布流せる気に邪を受けれは必しもその
時に遽に胎毒動発し表裏虚脱し血液
不順になるところにてもなけれとも元来児輩に不
足ある所に不正の邪気を犯せは必悪瘡発起

せらるゝを得ざるなり故に痘の邪を必しも一方

ありとする時流布の家に常ひし邪風に揮ふ

まで痘瘡を発せて形状に一ならざる所のゆゑ痘瘡

流行の時は痘瘡の形状大抵一般に似たるか

なり又天地自然の気の盛なる年を待して

種痘すれば邪風の盛を免るゝゆゑ十人か七八

人までは稀痘なる所以なり豈種痘の人

體中の毒気なかりしならんや只すまじは悪痘

を発することは十か九ハ不正の邪気に觸ざるに

起ることのなかるべし

主人又問曰痘瘡の源因は先生の説のごとく

飲食にて積しおかれたる一種の有形の糟液となき

は其発毒も必すしも小児の時に限らず人の齢

長ずるほど飲食にて有形の糟液多くなるべき

者なれば大人の時潜発もするべきことなるに却て

まゝならず然るに発痘は小児の時に限るは如何

なる我れも余答てのもしく生まりくらく已の
自ら飲食よりて血脈の精液を滋養なす時は
年歯これが壮年に至り一家血脈に定り肌肉堅
牢に至り長育の節あるとなさるゆゑ天地感
精の風氣に觸れ有脈中の精液を已の
良能にて發動することの能はさるゆゑ丈ゆゑその
脈精子に傳へ其子小児の時先天稟受無用
の精液を以て長育せんとする節に一身自然
の良能と天地感精の風氣と和合して發動する
ものなり凡人は素問にあるがごとく女子は陰物
にて陰は總て陽精をまつて盛衰することのゆゑ
七歳少陽の精の年にて腎氣盛になり二七十四
歳にして其盛を極めて子を生ずることをなす
故に此年に至りては氣血定り長育せんとする節
なるしなりすることなり男子陽物にて陽は總て
陰精をまつて盛衰することのゆゑ八歳少陰の精の

年よりて腎の宗衰へし二八十六の年にして天癸を

極めて子を生ずることのなり故に七七年に至りては

気血定り長育せんとする節なれはしかさることの

歯を以て癸の癒は免れ此歳より女子は十四歳

まで男子は十六歳まで此つゝかなけれは常清なり

或は児童此時癸も此難を去るは宗血既に

定り肌肉堅牢に至りて一生癸の癒を免るゝ

ことのもなり又天人の資質に依りては老後に

癸の癒するもの何ほどもなきは非常の事にて常経の

論する所にかゝはらさるなり素問上古天真論篇曰

女子七歳腎気盛歯更髪長二七而天癸至

任脉通太衝脉盛月事以時下故有子丈夫八

歳腎気実髪長歯更二八腎気盛天癸至

精気溢寫陰陽和故能有子こゝに至りて女子は

十四歳男子は十六歳まで気血定り長育せんとす

る節なれはしかさるを見るへし

○主人又問ていはく、疇昔問ふにいはく、痘瘡をわづらい
候病家あれば、必痘神憑りて、或は看病の人
痘鬼の意に處てなしたるは種々の奇靈
ありし、或は痘鬼ある事を將來いまだ言出さざるを
なりしに其言葉後年に驗ある事なれば
何れ実に不可思議なる事ども多きことなり、先生は
これを鬼神のなす所になさず人の精爽より
しわざのあまりて發くは其説をも詳にいひ聞し
玉ふへし。余答ていはく、人身の中に精爽と
いふ二物あり。精は一身の生活を總（スベテ）してこれを主る
依するものなり。爽は精中一種のものにて人の志意
及ぶ所をもて氣をなすものなり。假令ば人強死
などしての怨魂散せずして、或は人に憑り、或は世に
所謂遊靈などいふものになりて、其氣なりと
あるいは今は皆爽氣のなす所なり。痘
鬼などいふは、候病と異なり。又候は精液発もする

こよのうちも精中の爽気は妄に動きいでて善悪の及
ひ難き種々の奇実何とよのなり一方の精爽より上
こよは不思議の奇実をなすとよなりて孔夫子
と博物之君子也と感心して褒め玉ひし鄭の
子産は凡人に勝れし英才なる事左傳に見え
たるを覧て知るべし　左傳昭七年曰子産
適晋趙景子問焉曰伯有猶能為鬼乎子
産曰能人生始化曰魄既生魄陽曰魂用物
精多則魂魄強是以有精爽至於神明（於古人讀て爲）
（と讀する事王引之か經傳釋詞に見えたり）匹夫匹婦強死其魂魄猶能
馮依於人以爲淫厲況良霄我先君穆公之
冑子良之孫子耳之子敝邑之卿從政三世矣
鄭雖無腆抑諺曰蕞爾国而三世執政柄其
用物也弘矣其取精也多矣其族又大所馮厚
矣而強死能為鬼不亦宜乎とありて下の孔穎
達か正義にいはく精亦神也爽亦明也精是神

之未著爽是明之未昭と説けり此意を精爽ハ
人身中にありていまだ著明ならざるの名甚二物
なるにあらずして著明なるは神明不思議のことを
いふなりといへり此に由りて之を觀れば今
精爽といふものにありては時ありて不足候のことあ
なるものなれば必竟見神あることあるは何ぞさるあ
怪しむのあるべし然るに中華の医黄晟などいふ
人は康熙中の大家なるに集驗良方といふ書を
著し痘神は敬ふべきことなれど從ひがたし余讀
其書不覺噴飯滿案せり

○主人又とふて曰我業家は總て診脈をことゝせず
漢家は何ぞ此病を候ふとして診脈を第一の察法
となすよしなるに乳兒の痘瘡まで診脈を重ん
ずることあるや余答ていはく余は治療を行ふに
故乳子の脈を實用に試ることなけれども張介賓
は凡人胞胎を賦するより脈の象すべきものなれば必何ごとよ

なりと論しありて何となれは素問通評虚実論に
黄帝曰乳子而病熱脉懸小者何如岐伯曰手
足温則生寒則死帝曰乳子中風熱喘鳴肩息
者脉何如岐伯曰喘鳴肩息者脉實大也緩則
生急則死とあれは乳子にも診脉すへきは上
古神聖の方法とみえたり然るに後世に至りて
は脉学盛にして幼科如水鏡訣とかいふ書あり全幼
心鑑とかいふ書なとには別に三関を察する法を
立てゝ診脉は乳子に不用なることの論したり
然しこれらは古医方法に背けたることゆゑ張介
賓か素問の注に謗りたり其言にいはく夫三
関乃手陽明之浮絡原不足以候藏府之氣
且凡在小兒無論病與不病此脉皆紫白而
兼乎青紅雖時有濃淡之異而四色常不
相離也何以辨其紫為風紅為寒青為驚
白為痛又何以辨其雷驚人驚水驚獸驚之

槩言ハ大概の言といふ事

的確乎即余初年亦用此法然惟則摸疑似終屬茫然奈何近代医家習此為常全不知脉欲濟其危胡可得也及偏考内經則並無三関名目惟經脉篇有察手魚之色者若乎近之然乃槩言診法亦非獨為小児也然則三関之説特後世之異端耳不足憑也こゝに於ては乳子の察法ハ三関より診脉ハ第一とすへきなり又顱顖經といへる書には児三歳以下為純陽脉以一寸取之と説きに在りまする晋王叔和なとは流石診脉に長したる人ゆゑ児生死候歌といへるものを作りて小児乳後輒呃逆更兼脉乱無憂慮弦急之時被氣纒脉緩即是不消乳緊數細快亦少苦虚濡邪氣驚風助痢下宜腸急痛時浮大之脉帰泉路とのたまへり又荘氏脉歌及ひ茀先生辨児四季受脉といへるものにも皆赤子の脉を論

しかるに当今の世の医家に小児を二三歳
以後までもしめして診察すへしといふ者あらさるは
幼々新書に嬰童宝鑑を引て児三歳至七歳
其脉駃一息七八至為「平」といふを誤り解して
三歳以後小児の脉をしめして診すへしといふ
ことゝ覚えてゐるなり然し宝鑑にかくいへる
は十変八蒸大概の数を挙たることのみにて小児
三歳以後になりて必す診察すへしといふに
あらすそれといふ説を正しきなり十変八蒸のことは
古今医流よりの書に委しく論しあり今爰に
用なし故に略しぬ

○主人又問曰我蘭家究理の説にては神経といふ
ものありて是を主として二つにわかち一は意識神経
と名け一つは運化神経と名けて心性形骸の
用二つある二物にて漢家にてもこれ二物の
名はなきのみにして取もちゆるか漢にては何と名つ

けることのなるや余答曰蘭ニ所謂意識神経
といへるものは漢に所云魂のことなるべし運化
神経といへるものは魄のことなるべし然るに
霊枢本神篇及び左傳昭七年などに説る
ごとく魂魄は皆神霊の名にして気に依て神を
魂と名づけ形に依て神を魄と名つくれ凡そ人
初生の時より耳目聞見手足運動啼呼して
為るみなその故は形體に依れる神なりけり

精神性識流し給ふ所の物は元気に依ての
神なり其名神は一身の分肉中に流通するなり
其所を膜理と名づく金匱藏府經絡先後病
篇に膜者是三焦通會元眞之處爲血氣所
注理者是皮膚藏府之文理也と説きたまへ
是なり蘭にてはこれを神経と名づけて口鼻の
往来を知るは是名ありて往来する神の名を
二つに魂魄といふことに名をもつてこれを給ふべき

又劉熙か釈名といふ儒書に経とは徑なりと説
く経絡の経は径と同し気の道路といふ事なり
されハ気の場所なれハ漢家にては至極秘密にするそ
名をこそいへり霊枢九針十二原篇に経脉十二絡
脉十五凡二十七気以上下所出為井所溜為滎
所注為腧所行為経所入為合と説き玉ふ（下ニ且）
らは漢家は蘭に比すれハ至極精密なることなり
またしかし蘭家は漢の亦聖の説なき新らしき今の漢家
はおのれか学問に暗きゆゑ滔々天下皆漢は疎に
して蘭は密なりとおもへるは長大息の至りと謂
へしさてまた蘭家おのれの学を究理となつけて
誇らかし究理といふ文字は周易の係辞伝に
始て孔子のはしめし文語にて凡耳目及ひ難きを所
知恵悟り得へからさる所のことを心識黙契して
其理に通徹するをもて究理といふなり之
是ゆゑ聡明の聖人ならすしては究理することは難き

こゝなれハ蘭は生体の形状なとの事より耳目の及ふへきことの理を説きたるのことなるを窮理学といへりしは借称とすへし是は名を改めて格物（格物といふの字は大学の本にて毛奇齢王士禎の書格は量度なりと解したれハ正説なり校證は余か著せし大学詳解に詳に論す）学とすへしといひたらハ蘭学なるへしやとおもひたまへかし

○主人又問曰今の世俗凡て病あるをも不快と称するは漢語にては病しきる世にもおもひたるなり如何なるや医書なとにもいかにしてその医案なと記されたるを用ひ難くおもはるゝ余答曰否す三国志方技傳曰有一士大夫不快佗云君病深當破腹取陶宗儀か輟耕録云世謂有疾曰不快とあれハ何なりち不快の言は何とさるなり今の俗言にも不快とおもひたまふ辞は〳〵て原ある字好きハ古代の書にありきたるよの事共にあるなり書をかく事なれハ踏といひし字を変しへしとを知たまひしハ我か

本邦世俗一般の辞なり余初は諺の俗云にて雅
文に用ひ難しと思ひ居りしに王充が論衡
といふ書を読けるに筆墨と対して文字を
漢書郊祀志の顔師古が注に手謂書跡といふ
文あり王充は後漢の人顔師古は唐の人なれは
手習書跡といふ辞も中華の古き辞といふなり
今の俗語につたはりしかくれしるき鼓諺（アイタ）もあまたいふの
も知らで究めずして俄に俗云なりとて棄て
るへきことなり

○主人又問曰世俗せゝ病なまけを無恙といふは
太古の時人を喰ふ獣なり或は虫なりといふ
ことわりあるよしなれど算りたる捨の義なるや又病の
名なりといふ説は何れよりしてかはやりたる先生の
説を如何なりとや余答曰陶宗儀が輟耕録と
いふ書に恙の説をとゐなる集めいはく夫は皆世人
の知る所なり余はおもへらく無恙といふは無憂

とりつく因気なるへしいつれにしても前滞也
公孫弘カ傳ニ不幸罹霜露之疾何恙不已
顔師古カ注ニ恙憂也何憂於疾不止也と
説きおかれしことをいへるにては恙を獣虫の名と
なし或ハ病の名となすは非なり既に罹
疾といひて又恙といひては恙は憂の義にて
疾のことをいはさる明なり顔注ニ恙憂也とあるハ
尓雅にあるところをとりたるものなり

○主人又問曰今の医家薬一包を一貼と称して
其名目を何れの医書に出たることのあるや又
その起り如何なることにてありしや余答て金匱
雜療方篇退五藏虚熱四時加減柴胡飲子
方後右各㕮咀分為三帖一帖以水三升煮
取二升分温三服とのあるにいひし薬ニ帖といひ
し権輿なり今の医家帖の字貼に作るは
帖貼通用したることにあらすして又帖の字義に

二説あり一説には帖は服也一帖猶一服也公羊傳僖四年卒帖荆何休注云帖服也こゝにては後の義つく所なり又一説には包裹粘貼の義なり一帖猶一包といふと同しと説り二説を攷ふるに後説是に似たり如何となれは柴胡飲子方後分為三帖一帖以水三升煮取二升分温三服如人行四五里進一服と有て既に帖といひ又服といへは帖は服なりと解しては穏ならさるへし故に後説の包裹粘帖の義を正説となすへし又医家薬袋に大包小包なとゝ志るあ記すれは大包小包の名は不可也といふへきなれはまさに柴胡飲子の方後に毎帖分作三小帖毎小帖以水一升とあしらへは大帖小帖字認め記せは古称に叶ふへきことなり

○主人又問曰世の医家何れも薬にても二番煎しさせる人もあり又何れ薬にても二番煎しさせぬ

人の伺ふ元来漢方の法に二番煎しすることと
何ぞや余答曰二番煎しすることは古医方法
にはあらずして後世百方の中より一方任ずることなきなり
なり傷寒論金匱に數百方載せあまたの柴胡
飲子方後に再合滓為一服重煎都成四服
とのみありて二番煎しの仕法あるは只此方
のみに限れり左れは今世の医家薬にてよ
必二番煎しを為さしむるも古医方法に

叶ふまじけれども必二番煎しを為さしむるは尊
古医方法に背けるゆゑなり凡医なることあればかく
のごとき此筆にはしるすべきことなり

○主人又問曰是
本邦に生れて
本邦の医として是を読まで知るべきの至りなり嘗て大同
類聚方といふ医書ありしよしを承り何もの代に
ありたる方書なるや語り給ふべし我答て曰

如何なる由、大同類聚方といふ書ありしに、本朝医書の浩博なるものにて、元一百巻なり、たることなきよし、其書の撰者は、安倍真貞、出雲広貞といへり、

醍醐天皇の勅命を蒙りて編集せられたることなれど、散するを、今其原本は亡佚して、全書なきよしなり、筑紫太宰府の菅公の廟中にあり、全書一百巻今に伝はれりといふ説あれども、

虚実明ならず、さてこの書は凡三本あり、一は蒹葭堂本、一は観文楼本、一は古写本にて、是は禁中の蔵本なるよしなり、其偽作の説ありて、本は文政年間武家某氏校刻せしものなり、又摂津の生田神祠社司の富士宮家蔵、宇都宮家蔵文庫中にある古写本、康頼の跋辞あるに、官医何某先生も古本ありとのことなり、其佚医膽腊本の振るなり、好古の士億念して、このよしへのことく、百方に捜索して謄せしめは妙なるへしと

常のごとくしばしば来るなり

○主人又曰ここに某氏の婦人年三十七八二三年以前より小腹に血塊を生じ漸く大塊となり腹所鼓脹のごとくこれを按ずれば塊の大さ大胡瓜のごとし或医常に療治す月経は又常のごとく通ぜしを漢医破血の剤を与へてこれを攻ること一年余なりつゝ下血あれども其塊は減ぜず長大になりて少しも功なし之に由りおよそ治を思ひとまりて西医の診察を乞ふ血塊脹満には或はおほひてこれを診し月経常なくしてするは怪しむべきと思ひしに此婦人は必ず血病にて婦人のごとく月経ありてもその精血凝滞して塊をなすことありといひて内科撰要なとにも載せ所通経剤を用ひさせしも少しも効らず色々の製薬の如き世にある所の猛剤までも更に功なく前医より長久の間破血下剤を用ひしまゝなることの由を述べ

疲労して此比意に殺しなり大抵痞病は亜く以く解し兼たるの漢家神聖の方に良剤なきことのなるや余笑ていはく噎足下に病を視るに於きことさら此病を痞病と業として定論ありへきことなりことしなられは味としふへきなりまた病は血塊ニ病にては決して有るまし又は寒気腸中に入り血液停滞して腹膜一種の死肉を生しなるになり其塊血塊にあらすまた鼓脹にあらさる一種の病にて上古神聖腸覃病と名つけおかれしことのなるに近き世ては較しく診察誤り易きことゆゑあるは何れも之岐黄の説にては水と膚脹と鼓脹と腸覃と石瘕と石水との六種にわけて挙く其診法を委しておきたまへりさて此腸覃の病といふことの故霊枢水脹篇に論しおきたまへるに腸覃如何岐伯曰寒氣客於腸外與衛氣相搏氣不得榮因有所係癖而内著悪気乃起瘜肉

乃生其始生也大如雞卯稍以益大至其成
如懐子之状久者離藏按之則堅推之則移
月事以時下此其候也とあるをもつてみれは足下の
視し病人は腸覃病なることは明かなるへしと
といひしかは某氏勃然色を變していきまき
しかは予か業家祖の至まることの外なれは
此腸覃なとゝいふは腸に瘜肉の生する病なれ
從ふ者果極て怪しむへきことなりと不快の色を
をあらはせしかは余某氏旧癖疑ひ人を知る
ことを能はさるをおもひて和かにしていひ
は余強折して論説既に終れり願くは大白
一杯をあたへて医を謝すへしと既に大盞にて
二杯を尽しぬ主人もまた強いて数杯をな
す余沈酒中口より出るまゝの詩一首を作
吟しぬ夜更の時移りぬ其詩曰漢容儒
生蘭主医議論正否有誰知是如果是何

須辨宜和天倪酌玉卮

漢蘭酒話續篇終

醫家警說

馨生於刀圭家有故不襲箕裘逃醫入儒然醫書我所素好也以故子卧寅起起則隱梧對燈以昧爽間讀醫書為日課雖祈寒暑雨不敢闕其課也所自著亦有傷寒金匱文字䓁之書於是乎受業於余者医過其半矣是以常數被問醫之戒被問則答以三畏二字叩其說則口授詳細無所不竭近頃徒弟日繁

業事甚煩無暇答其問耳因削医家警説
一篇書以掛壁有問其戒者使就而讀之若
讀者以此説為藥石之言乃庶乎砭鍼於醫
家之痼疾矣其説曰三畏者何宣尼所謂
君子有三畏畏天命畏大人畏聖人之言小
人不知天命而不畏狎大人侮聖人之言是也
於虖此言也但不過泛説君子小人所以相反
之義已矣於方技之道似無毫所關渉然要
其帰醫之所以可為警戒者舎之豈他求哉
何者天之大德曰生其所以命人而為性亦然
矣生者何也仁是也夫技藝之於天下以仁術
為名者唯醫為然而已故其為道也以濟生
為心以治疾為事上溯軒轅之源下從長沙
之流究起死回生之奇術尽肉骨華枯之妙
技使斯民免横夭札瘥之患共躋于仁壽之
域矣果能如此豈可不謂知天命而畏之者哉

范文公有言曰不為良相應為良醫其意蓋
謂良医救人與良相養民無異也然而天下
之安危係為政之善悪疾家之死生属施技
之巧拙一失治療則枉殺人命其毒惨於蜂蠆
矣然世之為庸医者不思其義不察其理附
醫学於度外不措意於其間徒隆重門戸
楚鮮衣服簧巧唯求術之售於世豈非惑之
甚乎是以及其投劑也方枘圓鑿往々誤治遂
致殺人不以刃之譏焉是可謂不知天命而不
畏者也且夫醫雖小技賎業然執夭壽之權把
死生之柄則每得接大人之前當此時也不疾
則進養生保身之談使其節嗜欲禁淫佚以
塞疾疢之源焉疾則大人之死生固係醫療
之巧拙国家之安危固属大人之死生是以
焦心覃思診脉綢繆視疷懇切望聞不苟問
察必謹逐病状晷轉之時尽治療機変之策

施術必得投藥必中使大人不喪至貴之重器
長布德澤于国家焉果能如此豈可不謂畏
大人而能敬之者哉彼庸毉則不古医經不讀医
道不明馳心於他技或学點茶挿花之技或習
圍碁闘雞之事日數于大人之門脅肩諂笑
承意奉歡逢迎其所好而啓嗜欲淫佚之意
或倍酒筵杯席之間則抃歌起舞詼嘲戯謔
莫所不至自伍於俳優列於侏儒恬而莫知
愧之則固不免為名教罪者也及其有疾也
中心喜謂得獲利之資矣貪婪之情勃然興
起以故雖切脉診症之間其志不在治療乃竊倣
龍斷罔利之黠計不問寒熱不論虚實妄進
人参熊膽之貴藥輾轉推託百倍其價貪貨
賄求報謝遂使大人受夭折之災国家不能
蒙其德澤焉其可賤可悪莫是為甚是可
謂狎大人而不知畏之者也於戯医聖之言尚

載存于方策苟從其道者宜錯綜細繹思念經旨左繩右墨守其規矩常奉其言而不違其法也果能如此豈可不謂畏聖人而服其言者哉彼庸医則否徒誦靈經讀方書囫圇吞棗不曉其旨鹵莽滅裂無明其意倀倀乎不知所之甚者乃謂素靈難經金匱傷寒論千歳之腐談絕無益於治療焉求之於空言不如驗之於病者之便捷也於是一切處斷皆取之其臆漫施技術妄處湯藥竟至以所以活人者殺人之虐痛夫庸医之為迺蜴如斯之甚彼何仁術之云哉是可謂不畏聖人而侮其言者也然則医之所以可為警戒者舍之豈他求哉舍之豈他求哉

嘉永二年歳在乙酉季冬中浣日

出羽　伊藤馨子徳氏撰